

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372801045		
法人名	社会福祉法人 綾友会		
事業所名	グループホーム 桜の丘		
所在地	熊本県上益城郡甲佐町西寒野1151-2		
自己評価作成日	令和2年12月19日	評価結果市町村受理日	令和3年4月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年3月2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者の状態の変化に速やかに対応できるように協力医療期間との連携もあり、安心して暮らして頂けるホームである。
木造平屋作りのホームで、ゆったりとした造りで、広いリビングがあり、ガラス戸越しに、テラス、庭へと続き開放感がある。すぐそばの花壇や菜園により季節を感じられるように努めている。気候の良い季節には近隣ドライブを計画しホーム外での楽しみを提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この一年、職員の異動はないものの入居者の入退居の年というなか、コロナ禍に感染予防対策を徹底し、室内での生活の充実(例:朝からの元気良く行う体操、ホーム内花火大会、そーめん流し、河川敷でのひなたぼっこ、半夏生等のまんじゅう作り等)は、入居者の皆さんの今ある姿に直視した職員のケア姿勢として表われ、日々を楽しまれる様子は実にのびやかである。開設より経年、地域の中で確固たる基盤が築かれ、職員は笑顔で入居者の思いの実現に親身になって支援している。これまでの地域との交流は困難ではあるが、法人として地元商店の協力・連携による食支援が行われており、コロナ収束による地域行事の再開が、これまで通りの地域の中での生活に繋げるものと期待される。開放的な建物が、制限のかかる家族の面会を安易にする一因であり、入居者へのメッセージに親への思いや家族間の絆の深さが表出しており、一日も早いコロナの収束を祈願したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	桜の丘の基本理念をフロアーに掲示し、おひとりおひとりの生活の継続性を大切に日々の支援に取り組んでいる。	理念として「個の尊重、利用者が真ん中、地域と共に」を掲げ、行動指針をケア規範として日々のケアに直結させている。今年は子育て支援住宅で地域食堂として弁当を配布するなど地域貢献に努め、外出制限の中で、楽しみ事による(例:ホームだけの花火大会等)室内生活の充実等、利用者を中心にしたケアに理念の具現化として表われている。また、職員の明るさが入居者の笑顔を引き出していることも確認出来るホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の祭り、高校の体育祭、文化祭に出かけ交流をしている。食材の買出しも入居者と出かけていたが、本年度はコロナの影響で交流できず落ち着き次第再開していきたい。病院の定期診察は出掛けている。	これまでの地域な中での生活基盤は確立しているが、コロナ禍により地域の行事等が中止となる等制約された年であるが、高校からのインターンシップを受け入れ、地域住民との交流が困難な状況に町の広報誌を見ながら、日々の会話に繋げている。	コロナが収束に向かえば、これまで盛会であった地域との交流や祭り等の参加により、地域の中での生活が一層充実されるであろうと期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	高校生のインターンシップは受け入れを行ったが、他はコロナの影響で中止となった。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回運営推進会議を開催して。利用者の状況・行事報告を行い、そこで出たご意見を反映している。	コロナ禍の中、文書配布での実施、若しくは感染の状況により開催している。メンバー構成は充実し、地域の情報リサーチの場として外出に反映させ、その結果も報告されており、ケアサービスに反映させている。また、可視化(スライドの活用)した行事報告や、理念の啓発の一環として有意義な会議となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	年6回運営推進会議に区長、老人会長、家族代表者と行政職員も参加いただき協力いただいている。	行政担当者の運営推進会議への参加時ホームの現状を発信し、町からも要望等聞き取りされており、ニーズ調査アンケート等を事業計画に反映させている。新型コロナウイルス感染症対策に向けた情報や、コロナ感染症対策本部に行政も入られる等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	本体施設の身体拘束廃止委員会に参加して身体拘束『0』を維持出来るように努めている。玄関は夜間のみ施錠している。	3ヶ月毎に身体拘束廃止委員会に参加するとともに、新人研修やホーム内で勉強会を開催しており、拘束の弊害を正しく認識している。家族に説明の上、転倒防止及び職員が早めに察知する為として人感センサー及び離床センサーを設置している。入居者の中には「行ってきます」と散歩に出られており、職員は居場所確認を徹底している。	自由な生活環境が作られており、「身体拘束ゼロ宣言」などを掲げることで、ホーム体制の発信源の一環とされるよう検討いただきたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法について、スタッフ会議にて全員で確認した。職員間のコミュニケーションを多く持ち一人で抱え込まない環境づくりに心掛けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を必要と思われる方は現在、対象者はいない。今後必要時は、本体施設の社会福祉士に相談し、さらに地域包括センターに相談を検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、家族連絡後ホームにて重要事項説明後契約を行っている。解約時には、退去後の支援について話し合い、家族の不安を解消出来るよう努めている。改定の際は、家族会や面会時に説明を行い、理解を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時には入居者の日々の様子をお伝えし、安心していただくように声掛けを行っている。	家族等の訪問は現在窓越しではあるが、広い掃き出し窓からは入居者の生活の様子が確認出来、家族との対面の場として入居者及び家族の安心に繋げている。家族会の開催による意見交換、運営推進会議を問題提起の場となり、苦情相談窓口及第三者委員の存在を明確にし、説明されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	企画管理委員会(月1回)、運営推進会議(2ヶ月に1回)行い、意見や提案を聞いている。(月1のスタッフ会議は全員参加としている。)	法人の中の一角を占めるホームとして企画管理委員会出席により、法人の方針や苦情などの検討、行事等全体で連携し、全職員が共有している。また、ケアカンファレンスを含む毎月のスタッフ会議による意見交換や、職員個々が半年毎に目標を決め、半年毎の個人面談により進捗状況の精査及び次の半年の目標設定等を決める等職員が意見や提案を出す多くの機会が作られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事制度を導入している。各自が自らの力を発揮し、成長を実感できるように支援し、職員面接を年2回実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各職員の職責に応じた研修会の機会を作り、参加調整行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内や郡内の同業者の会議に参加するように努めていたが、今年度はコロナの影響で中止が続いている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	8. 9月に新規の1名ずつあり。家族や、入居前の施設職員に情報提供を依頼して、安心して暮らせる様に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前、入居後家族に連絡や面談し、御家族の意見を聞くように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時のケアプランを作成して、家族の同意を得ている。又、状態の経過を見ながらプランを変更している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事全般を入居者に声掛けし、一緒に行っている。個々に出来る事や得意なことを依頼し、一緒に行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で一緒に参加していただく行事は計画できていない。グループホームの広報誌は2か月に1度作成し発送。敬老会は個人写真も送った。衣替えの時期は不足分は家族に持参してもらうように連絡している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地元の祭りも本年は中止になった。ドライブなど出掛けた際は自宅近くに立ち寄りしている。	家族との窓越し面会、毎年出かける神社へのドライブ(例年ならば入居者用に席を用意してくださっている)、田植え・半夏生・お盆等に地元のまんじゅうを作る等地元で伝承されているものや馴染みの場所等が途切れないよう支援している。入居者と職員、入居者同士も馴染みの関係が築かれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	同じ地区の出身の方など同じ町内なので、お互いに話しやすく和やかな雰囲気でご過ごされている。気が合う人は席を近くに配置したりと配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本年度2名の退居があった。入院療養の為だったが、その後本体のショートや特養を利用されたため、本体に行った際は面会に行ったりした。御家族も落ち着かれるまでは相談、支援行った。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	以前の生活習慣、生活歴など考慮し、状態や表情・行動から思いや意向を汲み取り、出来るだけ意向・希望に沿えるようにしている。	入居者からの直接の申し出に寄り添い、単語は出るものの言葉にならない等の状況に個々の生活パターンを把握し、プラン作成に反映させている。理解力や意思がはっきりとされている等の状況の入居者には訴えや意見を聞きながら精神的の部分を支えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	新規入居の際、前の施設などからの情報、御家族等からの情報を聞いている。スタッフ間で情報を共有出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	総合記録シートや申し送り時を活用し現状の把握に努めている。又、スタッフ会議時には一ヶ月内のケア変更事項を中心に再度情報を確認し共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の意向や家族の訪問時に要望を聞いている。スタッフの気づきや意見をもとにプラン作成している。必要時は管理栄養士、PTなど専門家に意見を聞いている。	本人・家族の意向等をもとにした3ヶ月毎のモニタリング、半年毎に見直しとともに、本人や家族の意向や体調変化、退院後等随時見直しており、現状に即したプランである。また、入居者に関わる全職員での担当者会議を開催し、様々な視点からの話し合いが行われている。基本情報を新たにリサーチすることを下半期の目標として掲げられており、更に入居者の情報が活かされたプランにつながると大いに期待したい。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	総合記録シートに日々の様子などを記入し、職員間で共有している。ケアの変更必要時は総合記録シートと日誌に記入し把握。ケアプラン作成時に活かせるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍により外出は殆ど出来なかったが、受診で出かけた際は近隣をドライブしたりしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本体施設よりリフトカーを借用してコロナ禍にて少人数で出かけている。地元の祭り、甲佐高校生との交流会や食事は本年は中止となった。必要に応じて、併設施設のPTや管理栄養士、協力病院のPTに助言、指導を受けている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医に定期的に受診している。変化があれば、主治医、御家族に相談し、必要な病院への受診の支援をしている。	現在は、本人・家族の了承のもと全員が、協力医療機関をかかりつけ医とし定期受診を支援している。受診結果については訪問時や電話、時には受診帰りに自宅へ立ち寄り報告している。専門医の受診は、町外の場合家族による受診とし、必要時に応じ訪問歯科を利用している。日々健康管理を徹底し、異常の早期発見に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の状態の変化や総合記録シートの中から変化が確認できた場合は看護師に伝え、必要に応じて受診している。週に1度ダブルチェックを行い早期発見に努める。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはホームでの生活情報を伝える。病院の連携室、病棟NSと情報交換や、必要時にはDr.より説明を受け、安心して退院できるように連携をとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際には看取りの説明を行い事前指定書に記入していただき、状態変化時には再度確認を行っている。重症化しホームでの対応が難しくなった場合に、家族と話し合いを行い、納得して今後の方針を決定している。	入居時に重度化・終末期についてホームの方針を説明し、事前指定書を受け入れている。入居間もない家族にとっては具体的な考えは難しいであろうとして、指定書はいつでも変更でき、相談に応じていくことを申し添えている。介護度により家族に改めて聞き取りし、ホームで出来る限りお願いしたいとの申し出もあり、次の住処として特養への入所申し込みをされる等家族の思いに寄り添っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内研修や勉強会を定期的に行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の総合防災訓練、日曜日には地元の消防団の見回りがある。月1度の部署内の防災訓練を行っている。継続して行い防災意識を高めていきたい。	年2回法人との合同総合防災訓練や、毎月の部署内の防災訓練を実施している。地元の消防団による見回り警戒では、ホームの前で安全への呼びかけが行われており、職員は感謝を語っている。台風接近時や積雪の心配がある場合は、通勤が出来ない場合に備え、前もって宿泊する職員もいる。備蓄は法人とホームでリストを作成し有事に備えている。	昨今の自然災害は各地で想定外の被害をもたらしており、今後も職員が安心して夜勤時などに対応できるよう、継続した訓練に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人を尊重した言葉遣いや接し方が心がけている。特に入浴時、排泄時には羞恥心に充分配慮している。	入居者の尊厳やプライバシーに配慮した対応に努めることを心掛けている。呼称は苗字としているが、同姓の場合は家族の了承を得て、下の名前でも対応している。職員の守秘義務については、研修会などで周知徹底を図り、入居者の個人情報の使用については、契約時に承諾を得ている。	管理者は入居者と職員の仲の良さから、時に馴れ合いになっている場面も見られると課題を語っている。方言も尊厳に配慮した使用が周囲にも心地よいと思われる。今後も職員同士の注意喚起に期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ本人の意向や思いをくみ取るよう努めている。特に食べ物や飲み物は嗜好に合わせ本人の意思の確認や、選択してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の意向を尊重し、確認しながら一人ひとりのペースを大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や外出時は、職員が共に洋服を選び支援している。衣類など不足あった場合は御家族に連絡し補充している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理、盛り付け、配膳、片付けは職員と共に行っている。又、菜園の収穫で季節の野菜を美味しく食べている。一人ひとりの能力に合わせて手伝いの依頼を行うようにしている。	専任者を中心に日々の調理やソーメン流し、秋の味覚バーベキュー(秋刀魚・秋ナス他)、イベント時の刺身など季節感や楽しみとなる食事を提供している。外出の代わりにと、外注弁当も取りいれ、ミキサー食や一口カット等嚥下状態に対応し、食材は地元商店からの配達や菜園も活用しており、種まきや苗植え、収穫には入居者の出番が用意されている。また、梅ちぎり後のシロップや饅頭(ミョウガなど)おやつ作りも楽しんでいる。	面会された家族に「昨日はごっつおうだった！」と前日の行事食を伝えられる光景も見られた。今後も入居者の楽しみとなる食事支援が継続されることを期待したい。また、コロナ感染症の一日も早い収束により以前のように、入居者と職員と一緒に食卓に付けることを望みたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べやすい形態での提供や好まれる物の提供、補食、水分摂取に努め、体重増減にも充分注意している。総合記録シートに個々の一日目標水分量を記入し、摂取できるように促している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを実施している。出来るだけご自分で磨いていただき、不足部分や仕上げは介助している。協力歯科医院より訪問あり、磨き方など個別指導を受けいている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々のトイレサインをスタッフ間で情報共有し出来る限りトイレでの排泄を支援している。訴えが少ない方に関しては、排泄の間隔が長くなるように確認を行っている。必要時にはパットの種類の検討をして対応している。	チェック表を活用し、トイレでの排泄を支援している。現在、布パンツにパットを併用される方が殆どであるが、夜間のみリハビリパンツへの変更や、それぞれの居室に近い場所のトイレを主に利用されている。昼・夜声掛けや誘導、自立の方の見守りなど一人ひとりの状況に合わせて支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	栄養課や他部署と連携し食物繊維やオリゴ糖などを個々の症状にあわせ取り入れている。必要時毎月ある排泄ケア委員会で検討しアドバイスもらう。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望や体調に合わせて入浴を勧めている。拒否のある方には、次の日へ変更や時間をずらしたり、職員を交代して入浴していただいている。	一人ひとりの希望や体調を考慮し入浴を勧め、拒否のある方にも職員を交代したり、声掛けや別日に変更しながら週2回を基本として支援している。昨年、家庭用リフト浴が備わったことで、湯舟で温まる事が出来る他、入居者・職員双方にとって安全な入浴に繋がっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はお手伝いや運動などで活動していただき夜間には入眠できるようにしている。また、本人が望まれる場合には夜間に影響しない程度に日中も休んでいただくようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の服用されている薬の勉強会を行い、副作用等について理解するように努めている。内服の変更があれば口答以外にも申し送り日誌と総合記録シートに記入し確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人が昔していた事や得意なこと、興味のあることなどを、日々のお手伝いやレクリエーション活動につなげ、張りのある生活が出来るように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	玄関には施錠はせず出かけられる方には見守りを行い、様子を見て声掛けをして気分転換を図るように努めている。コロナ禍にて外出は控えた。	感染症予防対策を徹底し、紅葉見物等に出かけている。敷地内は法人職員によって手入れが行き届き、草花や樹木、菜園など季節感を醸し、菜園の管理や収穫の他、梅ちぎり等ホームの行事となっている。散歩を日課とされる方もおられ、靴を履き替えホーム周辺を2周して帰宅され、時には腕時計で「〇〇分かかった！」と、計られるようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	オヤツや食材の買出しに職員とショッピング楽しまれ、財布を渡しレジの支払いをお願いする時もあったが、今年は殆ど出来なかった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	施設の携帯電話がある為、希望時には話して頂き、手紙や贈り物が届くと本人に渡し、家族へ連絡して話をしていただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内はゆったりした空間が広がり、リビングの大きな窓ガラスからは外の風景が見られ開放感を感じられる。外出の後にはその時の記念写真を飾ったりしている。	リビングホールは掃き出しの大きな窓であり、今年度は特に窓越し面会も圧迫感もなく、家族との時間が持たれたようである。これまでの畳の間は、フローリングに改修されている。外出が制限された今年度は、納涼祭をはじめホールを活用しながら入居者同士で余暇を楽しむ時間を提供している。また、洗濯物をたたんだり、広報誌を広げる方など入居者の出番や日課が継続できる環境を整えている。洗面台は居室にも設置されているが、共用スペースを使用される方が殆どであり、使いやすいよう誘導や見守りに努めている。	リビングに置かれた入居者の写真掲示コーナーには、タイトルをつける等工夫することで更に、良い雰囲気になると思われ、検討いただきたい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングや庭、テラスなど好みの場所でそれぞれの時間を過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族が使い慣れた家具などを持ち込まれたり、配置を考えられる。写真や思い出の品を飾るなど本人が居心地よく過ごせるように工夫している。	それぞれの居室には、家族の協力により家具や思い出の写真等の他、系列施設から入居された方は、これまでの荷物をそのまま持ち込まれている。中には持参したテレビを遅くまで鑑賞される入居者もおられ、自宅での沿線にある居室作りである。	家族の訪問が出来ない現状であり、今後も家族に代わって居室内の掃除や掲示物(カレンダーなど)の確認に努め、安心に繋がるような報告を行われていくことが期待される。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗面台は居室と共有スペースにある。各居室に表札を設け、居室がわかるように工夫している。タオル置き場についても名前を表示し自分のものが使えるようにしている。		